

## 第13回アドバイザー・ボード会合の概要

「アドバイザー・ボード」の第13回会合の日時・出席者、概要等については、以下に示すとおりである。

日 時：2014（平成26）年2月19日（水） 13時00分～15時00分

場 所：神戸大学六甲台本館 3階大会議室

出席者：

アドバイザー・ボード委員（五十音順，敬称略）

井原理代，鈴木基史，高崎正弘，宮下國生，宮本又郎，室崎益輝

経営学研究科教員

水谷文俊，國部克彦，原 拓志，音川和久，内田浩史，末廣英生，松尾博文，藤原賢哉，黄 りん，鈴木竜太，梶原武久

（高松 肇）

### 概要

出席委員及び教員の紹介の後、水谷研究科長より、経営学研究科・経営学部の現状と課題についての説明があった。経営学研究科・経営学部の目標は、経営学分野における世界の教育研究拠点となることであり、それを前提に、特徴ある大学として更なる発展がなされる取組みを行ってきたことの説明がなされた。これまでの実績としては、①学部教育については、KIBERプログラムと全学レベルで採択されたグローバル人材育成事業を推進してきたこと、②Ph. D. 教育プログラムでは、経営学分野における英語による5年一貫博士課程プログラムであるSESAMIプログラムの1年目を推進してきたこと、③MBA教育プログラムでは、ABEST21による外部評価を受審したことと修士論文のレベル・内容・指導体制などを再検討したこと、④研究分野においては、卓越した大学院拠点形成支援補助事業を通じて研究活動を推進したこと、⑤その他の活動では、学生交流協定などを通じて海外の有力大学等との大学ネットワークの構築を推進したこと、などが報告された。一方、課題としては、学部教育の更なる質の向上、大学院への内部進学者数の増加、MBA教育のグローバル対応、国際水準に向けた研究力の更なる向上、が必要であることが報告された。

以上の概括説明を研究科長がおこなった後、主要な項目について、以下の通り報告がなされた。

まず第1に、本年度にとりまとめられた2010-2012年度自己評価・外部評価報告書の概要について、評価委員長である末廣英生教授から報告があった。自己評価・外部評価報告書は、教育・研究・社会連携など多岐にわたっているが、その中で特に教育活動と研究活動に焦点を絞り、取組み内容やその水準、そして課題について報告がなされた。

続いて、本研究科のグローバル教育の2つの柱である学部教育に関してはKIBERプログラムを、そしてPh. D. 教育に関してはSESAMIプログラムを、その推進責任者である松尾博文教授から説明がなされた。まずKIBERプログラムの成果としては、①交換留学提携校数が増加したこと、②英語コミュニケーションプログラムを精緻化したこと、③英語で講義される専門科目数も増加したこと、などが報告された。また、SESAMIプログラムに関しては、日本、中国、マレーシア、ギリシア、ウクライナからの学生9名を受入れ、1年目のコースが順調に進められているとの説明があった。このSESAMIプログラムは、企業活動を創造し、そのオペレーションにお金をまわす仕組みをつくる「創造経営」と経済的に実行可能で、他の企業、環境と地域社会との共生を図るサステナビリティ・アライアンス経営である「共生経営」を2つの柱とし、この2つについてPh. D. レベルでの専門家の育成するプログラムである。更に、MBAのグローバル対応に関連するものとして、SESAMIプログラムとMBAのシナジーの可能性についての説明がなされた。

そして報告の最後は、今後の経営学研究科が重点的に取り組むべき教育・研究に関して、「経営学研究科・経営学部の方向性について」と題して、次期研究科長である國部克彦教授より報告がなされた。文理融合型総合大学としての特徴を活かし、研究大学としての強化促進を図るために色々な施策を実行していくことが、説明された。また、六甲台の社会科学系5部局が協力して教育・研究を遂行する組織である「社会科学系教育研究府」との連携プロジェクトである「グローバル・グリーンサプライチェーンマネジメント」についても、一つの例示として説明がなされた。

これらの報告の後、経営学研究科が取り組んでいる内容に関して、アドバイザー・ボード委員からアドバイスやコメント、更には出席者による活発な意見交換がなされた。